

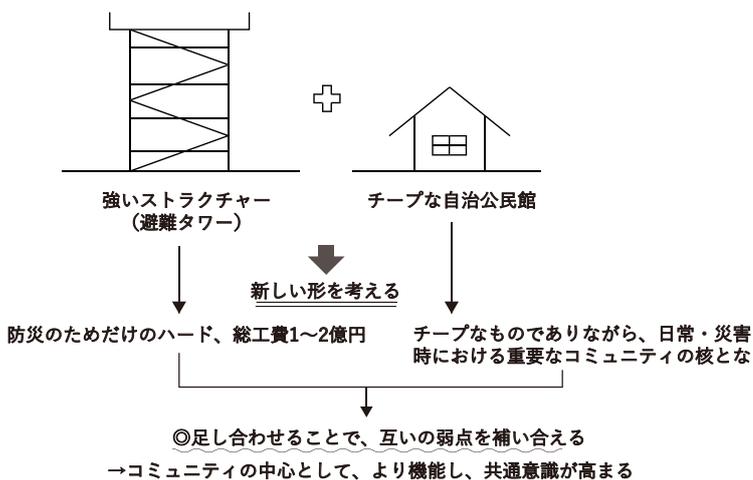
塔は旧来の作法にのっとる



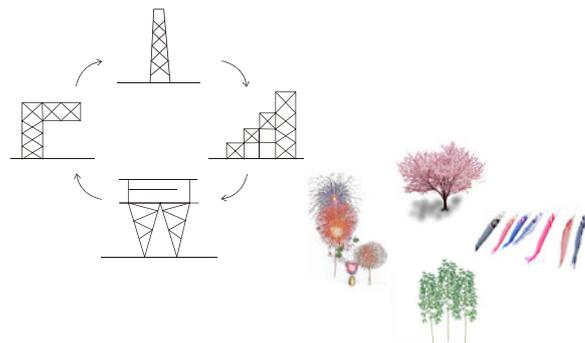
加藤大基
建築設計計画 | 研究室

全体プログラム

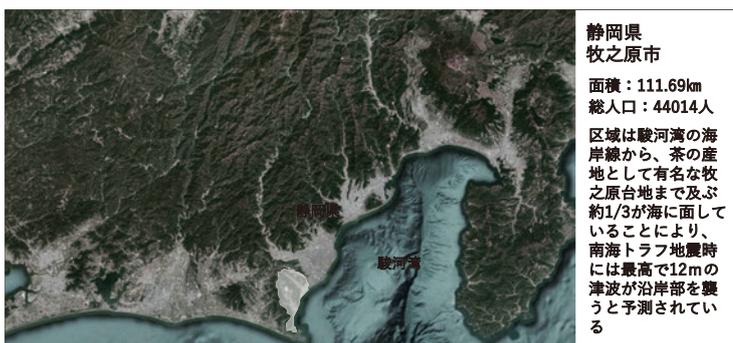
場所の周期（周回）・時間の周期



1年を通して、何月はこのタワーで行事があり
時期によってタワーの色が出てくるような



1年の四季、月ごとのイベント、タワーごとでの1日の流れ
子どものときの場所の感覚と



牧之原市 静波地区

対象とするのは、11箇所の自治公民館と、すでに建つ6箇所の津波避難タワー

地区の特徴としては、南は駿河湾に面し、夏は海水客でにぎわう静波海水浴場がある
北は山に囲まれ、自然に囲まれた豊かな場所といえる

ここでは、既存の津波避難タワーの配置確認し、再配置し新たにデザインしなおすもの、場所をそのままにデザインの検討をするものに分類し、さらにそれらのタワーに自治公民館の機能を添わ



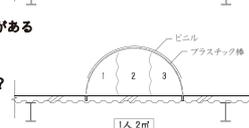
非常用簡易ビニールテント

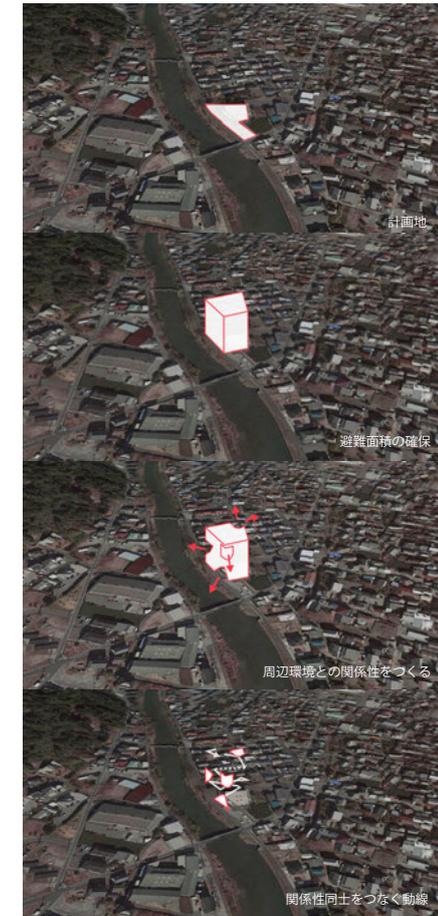


メリット
設営が簡単である上にそこの風でも飛んでいかない強度がある
風雨をしのぐことが可能・屋外
温室効果により冬でも快適

このビニールハウスの技術を災害時上手く利用できないか？

農家・高齢者の活躍
組み立て、利用方法 (調湿・環境面)





□プログラム

ここでは、'花見'に設計のプログラムの焦点をあてる
 春になって、勝間田川沿いで開かれる桜まつりのメイン会場となることを想定し、そこに来た人々が、'花見'というイベントを今までと違った非日常的な角度から楽しむことができるように、塔そのものがデザインされる
 並木道における花見という人々のふるまいが、塔に巻き付くように垂直方向へと吸い上げられ年に一度タワーをにぎやかにする

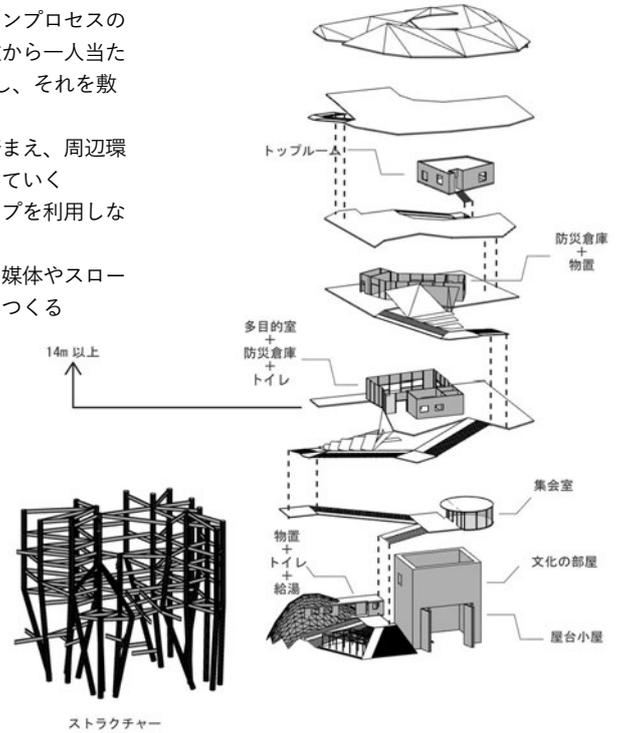
□デザイン

観桜塔(仲町タワー)のデザインプロセスの順を追うと、まず避難想定人数から一人当たり2㎡を確保した床面積を算出し、それを敷地に対して最大限確保していく
 次に、設定したプログラムを踏まえ、周辺環境とタワーとの関係性をつくっていく
 それらの関係性を、避難スロープを利用しながら動線をつないでいく
 それらの関係性をつくるための媒体やスロープ動線がタワーのファサードをつくる

□コンセプト

各タワーそれぞれで、個性のあるデザイン・個性のある行事やイベントを行う場所とし、全体をひとつのまとまりとした時に新しい周期が生まれるようにした
 例えば、'火花'をメインのプログラムとしたタワーや、'七夕'で住民参加型の飾りつけイベントを許容するタワー、'初日の出'を正面から拝むことができるタワー、'子どもの日'の鯉のぼりをそれと同じ目線から一緒になって泳いでいるかのように楽しめるタワーなどがある

観桜塔(仲町タワー) アクソメ図



← 観桜塔(仲町タワー) 周辺環境を踏まえたダイアグラム

必要諸室・各種面積

- 集会室
- 文化の部屋
- 屋台小屋
- 物置
- 防災倉庫
- トイレ
- 給湯室
- 多目的室
- トッブルーム
- 子どもだけの部屋
- 他塔との交信

敷地面積: 1420㎡
 建築面積: 926㎡
 建蔽率: 65%
 避難階床面積: 1806㎡ (倉庫等を除く)
 (≧1784㎡)

各タワーアクソメ図・パース

